

〔論 文〕

御主イエスの御受難と栄光について潜伏キリシタンは如何に語り伝えてきたか — 『天地始之事』における聖書物語の受け止め（2）

梶田 叡一

KAJITA, Eiichi

〔キーワード：潜伏キリシタンキリスト教の日本的受容イエスの受難イエスの復活と栄光天地始之事新約聖書〕

要 旨

長崎や五島列島の潜伏キリシタンが、幕末の「信徒再発見」の時期まで密やかに伝承してきた『天地始之事』と称する長編の物語(注1)について、その主要な内容についての検討を引き続き行ってみることにしたい。特に、『天地始之事』の基盤となった旧・新約聖書の物語やキリシタン宣教師の教えが、厳しい禁教下で世代を重ねた長年月の潜伏生活の中でどのように変容していったか、そこに日本在来の思想的土壌の影響はどのような形で認められるのか、さらには、その基盤となっている日本人の伝統的な心性についてどのように捉えたらいいのか、について考えてみたいと思う(注2)。

先に検討した第3テーマ「御主イエスのご誕生と成長」(注3)の引き続きとして、第4のテーマ「御主イエスの御受難と栄光」がくる。新約聖書の語るところによれば、受難と栄光に至るまでにイエスとその弟子集団による病人の癒しと「神の国の到来」を告げ知らせる巡回布教があるわけである。これこそイエスの「公生活」として伝えられている中核的な社会活動だったわけであるが、潜伏キリシタンの伝承ではほとんど触れられていない。イエスと彼を取り巻く集団のこうした社会的活動が当時の社会的権力層にもたらした警戒心がイエスの逮捕・審判・死刑に繋がっていくわけであり、こうした「御受難」はイエスの生涯のクライマックスとでも言うべき部分である。これをどのような形で「イエスの栄光」に結びつけて考えるかが、古今のキリスト教徒にとってイエス信仰の中核に関わる重要な部分になってきている。しかしながら、ここで詳しく見ていくように、日本の潜伏キリシタンの場合は、イエスの社会的活動には触れないまま「御受難と栄光」に一足飛びに進み、これを重要な伝承事項として取り上げている。これは、日本の潜伏キリシタンのイエス理解の重要な特徴を示すものと言ってよいであろう。

この「御主イエスの御受難と栄光」の大物語には、次の5つの物語が含まれている。

- (11) 御主が弟子ジュウダツに裏切られ密告される物語。
- (12) 帝王ヨロウテツに御主が捕縛され苦難を与えられる物語。
- (13) 御主のカルワ竜ヶ嶽での最後の御受難と御死去の物語。
- (14) 御主の御出現と御昇天の物語。
- (15) 御母マルヤを初めとする御主ゆかりの人達の天での処遇の物語。

これらの物語は元々西欧諸国から渡来した宣教師達の教えに基づくものであるだけに、その内容はいずれも新約聖書に述べられている物語や、それにまつわるカトリック教会の古い伝承を下敷きにしている部分が多い。しかし同時に、新約聖書や西欧カトリック驚異会の伝承とは無縁の、日本キリシタン独自のものと言うべき部分も少なくない。そうした点を念頭に置きながら、順を追って各物語ごとに検討してみることしよう。

【物語 11 御主が弟子ジュウダツに裏切られ密告される】

弟子の1人ジュウダツは、御主イエスの居所をベレンの帝王ヨロウテツに訴えて出れば褒美の大金が貰えるだろう、と悪心を起こす。彼は帝王ヨロウテツに密告に行き所期の通りの大金を貰うが、そのとたん面相が悪く変容し、他の弟子達に責められ、大金を捨てて自殺してしまう。この物語は、次に示す3つの小物語（エピソード）から構成されている。

なお、小物語の冒頭の数字は『天地始之事』全体を構成する小物語の通し番号であり、また途中の何か所かで挿入されている（）の語句は、筆者による説明的なものである。

(45) 弟子の1人ジュウダツは、御主イエスの居所をベレンの帝王ヨロウテツに訴えて褒美の大金を貰おうと悪心を起こす。御主イエスは人の心が読めるのでそのことを知り、弟子達にそのことを告げるが、弟子達は口を揃えて「この中にそんな気持ちを持つ者は居ません」と言う。御主イエスは、これに対して「朝ごとに飯に汁をかけて食べる者がその裏切り者だ」と言う。

←新約聖書には、12弟子の1人ユダがイエスの居所を密告して賞金を貰おうとする、という裏切り物語があり、以下に展開されるジュウダツの裏切り物語の原形となっている。ただし、「朝ごとに飯に汁をかけて食べる者」といった話は新約聖書には見られない。

(46) ジュウダツは悪心がつり、慎みをすべき水曜日（クワルタ）なのにいつも通りの食事をし（汁掛け御飯を食べ）、ベレンの国に急いだ。そして帝王ヨロウテツに訴えて「帝王様の捜し求めておられた人は、ロウマの国のサンタ・エキレンジャの寺の和尚をしています。早く召し捕って死刑にして下さい」と言う。帝王ヨロウテツはこれを聞いて喜び、褒美の大金を与えた。

←新約聖書に描かれている情景とは異なっている。例えばマルコ福音書では、裏切り者のユダが、ゲッセマニの園で祈った後で弟子達に話しておられるイエスのところに、祭司長らの遣わした武装した下役や民衆を案内し、予め彼らと打合せておいた通りイエスに「先生」と声を掛けて接吻し、「この人こそイエスである」ということを密告する、という場面が描かれている。

(47) ジュウダツは褒美を受け取って帰る途中、にわかになその面相が異様なものになり、どうにもならないままエキレンジャに帰った。そこに他の弟子達が集まってきて、その面相を見て、「お前は師匠のことを訴えてきたんだな、この不屈き者め！」と口々に罵ったので、ジュウダツは逃げ出して、寺の脇に褒美の大金を捨て、森の茂みに走って入って、首をくくって自殺した。サンタ・エキレンジャの寺の脇にある「金塚（カヅカ）」がその遺跡である。

←新約聖書には、ユダが密告した後で異様な面相に変容したなどということは一切述べられていない。裏切り者ユダは後に自殺したということが報じられているのみである。

【物語 12 帝王ヨロウテツに御主が捕縛され苦難を与えられる】

帝王ヨロウテツは御主を捕らえるためローマに軍を派遣する。そして捕らえた御主を高手小手にくくりあげ、首に縄を掛けて、ベレンまで引き立てていった。そして奇跡を起こして逃げ出しては困るというので柱にくくりつけ、骨も砕けよとばかりに打つなど様々な苦難を与えた。そしてカルワ竜ヶ嶽に引きづり上げて磔にせよ、という下知のもと、御主は苦難の道のりをたどる。いわゆる「十字架の道行き」である。なお、こうした受難の端緒として新約聖書には「イエスの本性」をめぐってユダヤの大祭司やローマ総督の下で行われたイエスとの問答があるわけであるが、ここには対応する部分は見られない。少し詳しく各エピソードを見てみると、以下の通りとなる。

(48) 帝王ヨロウテツは、御主を逮捕しようと、ポンショとピラウトに大軍を与え、ローマの国に急ぎ向かわせた。サンタ・エキレンジャの寺に着くと、「逃がすな」と下知して二重三重に包囲した。御主は少しも騒がず、弟子達にジュウダツのことを尋ねられる。弟子達はジュウダツの面相が変わり、自分達が強く叱ったら、面目ないと山の中で自殺したと告げる。御主は、「以前から自分は苦しみを引き受けて命を捨てる、と言ってきたではないか。自殺しなければ助けてやったものを、残念だ!」とおっしゃった。

←新約聖書では、裏切り者ユダの自殺についてイエスの発言は見られない。なお、「人々の苦しみのための“贖罪の羊”として自分自身を十字架での死に導いた」という刑死の意味づけが、初期クリスチャンの重要なイエス信仰の柱となっていたことを考えると、ここでの御主の発言は潜伏キリシタン達が、キリスト教の柱ともなるイエス観をきちんと引き継いでいることを伺わせるものである。ちなみに、イエス在生当時ユダヤを支配しており、イエスに対する十字架刑の決定を行ったローマ総督の名前がポンショ・ピラトであるが、この名が分割されて御主を捕らえるために派遣された2人の将軍の名前として用いられている点は興味深い。

(49) その時、その山ではインヘルノ(地獄)の炎が燃え上がった。捕らえに来た悪人達に地獄の様子を見せようとしてであった。捕らえに来た者は驚いたが、御主を捕らえ、高手小手にくくり上げ、引き立てていった。御首に縄を掛け、羊をひく時と同じ様子にし、

速く歩け、と後ろから打ちたたいたり、鈍いやつだと棒で打ったりして、ベレンの国に連れていった。

←新約聖書には、こうした記述は一切見られない。新約聖書の伝える「十字架の道行き」とは状況理解の根本が異なっているように思われるが、御主が処刑場まで苦しめられながら連行されていった、という点はここにも十分に表現されている。

(50) 御主は帝王ヨロウテツの前に引き据えられる。ヨロウテツは捕らえに行った者にねぎらいの言葉をかけ、「奇跡を起こすと聞いているので気をつけよ」と言って、御主を石の柱にくくりつけさせる。そして、骨も砕けよとばかりに打ったので、打った竹が微塵に砕けたほどであった。御口には苦きものや辛きものをねじ入れ、頭には金輪の冠を無理やり嵌めさせたので、御主の身には滝の水のように血潮が流れていた。ヨ

ロウテツは、「数万の子供を殺したのも、そいつのためだ。カルワ竜ヶ嶽に引きずって行って磔にしろ」と命じ、御主を連行させた。

←新約聖書には、こうした記述は見られない。『天地始之事』では御主を殺すのは帝王ヨロウテツ自身にとって邪魔になるからであり、先に帝王が命じて数万もの子供を殺させたのも、幼かった御主を抹殺するためだったが、それもまた御主が存在したこと自体がそうさせたのだ、という身勝手な意味づけがここではされている。

(51) サンチシマというところのクロウスという大木があり、66間の長さがあるが、その根元の33間の部分にデウスが天下って火を付けられると、火は消えることなく枝の先まで燃え続ける。この木が全て焼けてしまうと天の人と地の火が一度に和合して世界が滅ぶといわれており、恐ろしいことである。そういうことで、木の先の部分33間を切り取って磔の台にしつらえ、これを御主の肩に結わえつけ、カルワ竜ヶ嶽へと追い登らせていく。途中でペロウニカという水くみの女とゆきあうが、彼女は御主を哀れと思い、御血の汗をぬぐい、水をさしあげる。御主は喜んで、感謝し、「必ず一度はたすかりを得る

ことになろう」とおっしゃった。御血の汗をぬぐった手ぬぐいに御顔の様子が写っていたので、彼女はもったいないと思い、サンタ・エケレンジャの寺に納めたという。

←クロウスの大木にデウスの天下りによって火がついて焼けてしまうと天の人と地の火が和合して世界が滅ぶ、といった話は興味深いものであるが、新約聖書にも西欧キリスト教世界の伝承にも一切見られないものである。なお、水くみ女ペロウニカが御主の汗と血潮を拭い、その手ぬぐいに御主の顔がそのまま写っていたという聖蓋布の話の方は、西欧キリスト教世界に根強い伝承であるが、新約聖書には述べられていない。

【物語 13 御主のカルワ竜ヶ嶽での最後の御受難と御死去】

イエスはゴルゴダの丘で十字架にかけられ処刑されたわけであるが、地名はカルワ竜ヶ嶽となっているにせよ、情景描写としては新約聖書が伝えるところをかなりの程度まで表現し、伝えていると言ってよい。イエスの生涯のクライマックスとも言える部分であるだけに、この辺の物語は重要な意味を持つ。

(52) 御主をカルワ竜ヶ嶽に引き登らせて、そこで死刑囚2人の真ん中に置き、御手足を大釘で打ちつけ、2人の死刑囚を左右に括り付けて、それを押し立てた。1人の死刑囚は「お前のせいでこんな残酷な処刑の仕方をされることになって」と恨みごとを言う。もう1人の死刑囚は、「何を言うか、我々こそ大罪人である。この人は何の罪もないのに処刑されようとしている。お気の毒なことである。」と言う。

←新約聖書のルカ福音書でも、左右の十字架に掛けられた2人の罪人が、1人はイエスを罵るが、1人はイエスに「御国に行かれたら私のことを思い出してください」と口にする、といったほぼ同様の情景を伝えている。

(53) この2人の死刑囚の由来を調べてみると、御主が御誕生の折に、その産湯の湯を掛けて貰って酷い腫れ物が直った、という子供であった。成長してから悪い心を持つようになり、ついには死刑になるまでになったわけであるが、御主の最後の折に御一緒にクルスに掛かって御供することになったのも、因縁というも

のであろう。

←新約聖書には、こうした因縁話は一切見られない。

(54) カルワ竜ヶ嶽では入れ替り立ち替り毎日拷問を受けられた。このことを46人の弟子達は伝え聞いて悲しみ、様々な苦行をし、断食して自殺し、御供しようとして、身を苦しめるものもいた。御主はこのことをお知りになって、オンパッションのオラシヨという祈りをお作りになった。

←オンパッション(苦しみ)のオラシヨ(祈り)と呼ばれる伝承の祈りの由来を説くもの。ただし新約聖書には、こうした話は一切見られない。

(55) 帝王ヨロウテツは何度も役人達に「早く殺してしまえ」と命ずるが、役人達がいくら殺そうとしても身体に力が入らなかつたりしてできない。そこに目の不自由な者が来たので、「お金をやるからとどめを刺せ」と言うと、言われた通りに刺す。すると血潮が流れ、それが目に入って目が見えるようになった。この時御主は「目の不自由な者に死後の救いはないぞ」とおっしゃった。

←こうした話は新訳聖書に一切見られない。イエスは目の不自由な人を初め障害のある人や病いの人に対して常に暖かい同情の念を持って接していたことが新約聖書の各福音書に描かれており、ここでの描かれている態度とは正反対のものと言ってよい。

(56) この目の不自由な男は思う存分とどめを刺し、褒美のお金をもらおうと、また目が開かなくなって元の不自由な身にもどった。金に目がくらんだからである。右と左の罪人も息が絶えたが、右の罪人はもったいないことに御主のお供をして天に昇っていき、左の罪人は悲しいことにインヘルノ(地獄)に沈んでいった。←こうした形で描かれた目の不自由な男の話は新訳聖書に一切見られない。また左右の十字架につけられた罪人は、先にも触れたように1人はイエスを罵り、1人はそれをたしなめたとの記述があり、イエスは自分の肩を持ってくれた罪人に対して「一緒に楽園に行くだろう」と言葉をかけた、との記述がルカ福音書にある。

(57) 御主の母親マルヤは、亡くなられた遺骸を見て嘆かれた。帝王ヨロウテツは、その様子を見て、彼女が御主の母親であることを聞き、「親子の別れだ、なごりを惜しませてやるがいい」と言う。マルヤはそれを聞いて御遺骸にひっしと抱き付き、嘆き悲しまれた。このままでは嘆きは尽きないだろうと、警護の役人は石の棺に御遺骸を納めて知に埋め、昼夜にわたって番を付けた。

←このような話も新訳聖書には一切見られない。しかし、イエスの御遺骸を抱いている聖母マリアの姿は、バチカンのサンピエトロ大聖堂にあるミケランジェロの絵としてもあり、西欧キリスト教世界では典型的な伝承イメージである。イエスの遺骸を貫き下げて石の墓に葬ったのは、福音書によればアリマタヤのヨゼフらである。

【物語 14 御主の御出現と御昇天】

御主は、亡くなられてから大地の底に下られ、次の日に棺の上に現れられたので、多くの弟子がこれを拝んだ、という御出現と、その後天帝の右の座につかれ、人々を助けるために天下ってサンタ・エキレンジャの

寺に落ち着かれるが、50 日目に昇天された、ということが物語られる。初代キリスト教徒から引き継いできたイエス伝説のクライマックスに当る部分である。

(58) 金曜日、御主は大地の底に下っていかれ、土曜日までそこに御滞在、棺の上に現れられたので多くの弟子が拝まれた。それから天に昇られ、3 日目に天帝デウスの右の座にお座りになる。それから、生きている人や亡くなられた人のお助けになるため天下られて、サンタ・エキレンジャの寺に落ち着かれる。夕方5 ヶ条（ロザリオの栄の玄義）の祝日はこの日のことである。

←この物語も新訳聖書に記されているところとは大きく異なっている。亡くなったはずのイエスの遺骸が墓から消えて無くなり、後に一部の弟子に対してイエスが生きた姿で現れた、と新約聖書には記されている。なお天国では御主イエスが天帝デウスの右の座に座っている、といったイメージは、カトリック教会の長い伝統の中で語り続けられたことであり、日本のキリシタンにもそれが伝えられてきていたことが如実にうかがわれる。それからまた地上に戻られ、元のサンタ・エキレンジャの寺に落ち着かれる、といった話は新約聖書にもどこにもない。

(59) 弟子頭のバツパが御効力の御門までお出迎えし、そこに 40 日間滞在されて死後のたすかりのことを教えられた。そして使徒達と 10 日間話し合われ、50 日目に昇天していかれた。

←こうした物語も新訳聖書には記されていない。ただ、弟子頭が教皇＝バツパであるとか、復活後 50 日して昇天していかれた、という物語は、カトリック教会の長年月にわたる信仰を反映したものと言ってよいであろう。

【物語 15 御母マルヤを初めとする御主ゆかりの人達の天での処遇】

この一連の「受難を通しての昇天・栄光」物語の最後に、御母マルヤを初めとする御主ゆかりの人達もまた最後には天国で栄光の位置を与えられたことが語られる。ただし、新約聖書などと照らし合わせた場合、内容的に特異な点が見られ、興味深い。

(60) 御母マルヤは天からお告げがあり、オリベテ山から御昇天になった。天では、御母は人々の祈りを取り次ぐ役、御主は人々を救う役とされ、御親のデウス(天帝)と共に 3 体の神になられた。3 体と言ってもそもそもは 1 体であらせられるとのことである。

←聖母マリアが人々の祈りの取り次ぎ役である、といった信仰は、西欧キリスト教の世界では伝統的かつ根強いイメージである。これが宣教師達によって日本キリシタンに伝えられていたのであろう。しかしながら、聖母とイエスとデウスとで三位一体を成す、という理解は、まったく日本キリシタン独自のものである。御母マルヤに対する尊崇の念の強さが、元々の父(デウス)と子(御主イエス)と聖霊からなる三位一体論をそう誤解させたのであろうか。

(61) 帝王ヨロウテツの命によって殺された数万の幼子はコロテルで迷っていたが、御主はそれぞれに名前を与えられ、パライツ(天国)に引き上げられた。また、御誕生の折に宿を貸してくれた人、拝みに来てくれた 3 人の帝王、全ての弟子達、逃避行の際に助けてもらった麦作りの

農夫、受難の道行きで親切にしてもらった水くみのペロウニカ、ら皆を御昇天させられ、パライソ(天国)に迎え入れられた、とのことである。

←こうした内容の物語は、新約聖書のどこにもないし、また西欧キリスト教の伝統的な言い伝えにも見られない。しかし、イエスが生前お世話になった方々は死後どこにいったのであろうか、といった疑問が日本のキリシタンの口から発せられれば、宣教師達は「天国に迎え入れられたらろう」と異口同音に答えたであろう。そう考えるなら、ここでのこうした記述は十分に理解できるところである。

(62) 御母マルヤはデウス(天帝)に、『私はビルゼン(処女)の行をしてしてしておりますので、私を慕って焦がれ死んだ人がいます。この人を仮の夫としてきましたが、どうか助けてください』とお願いする。するとすぐにお助けがあって、この人と夫婦にされ、天の位を与えられた。また御主はゼジウスとなられた。

←聖母マリアが天に上げられた後で結婚した、といった物語は女性の幸せについての日本的感性を示すものとして非常に興味深いものである。もちろん、こうした物語は新約聖書のどこにもないし、西欧キリスト教世界では想像を絶した驚天動地の想定であろうが。ちなみに、ここでの物語は先にエピソード(19)(20)として、ロソンの国の帝王サンゼン・セジュウスが御母マルヤと結婚できなくて焦がれ死んだ、と語られていることの後日談である。

(63) 水くみ女のペロウニカはアネイス・テウ(アニュス・デイ=神の子羊)の位を授かり、この世の功力をもって守っておられるとのことである。サンミゲリ(大天使ミカエルのスペイン名)は天坪の役を与えられ、ジュリシャレン堂で人々の罪の大きさを糾され、善人はパライソ(天国)に、悪人はインヘルノ(地獄)に落とし、また罪の大小について恥を知るよう諭され、反省を促されるている。またサンミゲルは、フルカトフリア(煉獄)へと行かせた人であっても徹底的に罪を反省した場合には、インヘルノ(地獄)に行かなくてもよいようにされる。人を殺したり自殺したりした人はインヘルノ(地獄)に落とされ、末世までたすからないということである。

←ペロウニカのこうした話は聖書にもどこにもない。しかし、サンミゲル(大天使ミカエル)の話は西欧キリスト教世界に伝統的に言われてきたところであり、宣教師から伝えられたままがここに忠実に伝承されているようである。

(64) サンペイトロ(聖ペテロ)はパライソ(天国)の御門の役である。ここでは門戸開き(モトウヒキ)のオラッショ(祈り)をして通ることになっている。サンパウロ(聖パウロ)は善悪を吟味し、糾される。善の無い人はフルカトウリア(煉獄)送りとなり、罪の軽重により

3時間から33年までの尋問を受け、その後でサンジュアン(聖ジュアン)の御あらためによってアポウストロの御許しを受け、サントウス(聖者達)の御取り次ぎをもってパライソ(天国)の幸せみ受けさせてもらうことになっている。

←聖ペテロを天国の門の役に任ずるといったくだけり以外は、必ずしも新約聖書に関連個所があるわけではない。しかしながら、決定的な悪人ではないが全面的な善人でもない者は死後において天国と地獄の間となる煉獄で己の罪の償いとなる試練を受け、その後で天国に受け入れられる、といったくだけりは、西欧キリスト教世界に伝統的に言われてきたところをよく反映したものと言ってよい。

【「御主イエスの御受難と栄光」の物語の特記すべき特徴】

以上に見てきたように、『天地始之事』にはイエスの受難(逮捕と刑死)と栄光(復活と昇天と天の国での高い処遇)について、細部は別として大筋では新約聖書の4福音書に述べられてきたところや西欧キリスト教世界で伝承されてきたところが土台になっている。しかしながら、『天地始之事』に述べられているところの特異な特徴として、少なくとも以下のような点については指摘しておかなくてはならないであろう。

(1)新約聖書に伺われるように、イエス(御主)が民衆に向けて語り続けたメッセージが権力者側からは反体制的なものとして受け止められ、これが警戒されて、イエス(御主)の逮捕と刑死に繋がったこと、についての記述が『天地始之事』には一切見られない。ここに見られるのは、簡単に言えば、絶対的な権力者である帝王ヨロウテツに嫌悪され排除された、という点のみである

(2)新約聖書では、イエスの逮捕の後でユダヤ教の大祭司とローマ総督とに裁かれる場面があり、イエスが「神の子」と名乗ったとか、「ユダヤ人の王」と呼称されたといった、当時のユダヤ教秩序としてもローマ帝国支配としても絶対的に許されない点についての言及があるが、『天地始之事』ではそうした点は一切触れられていない。イエス(御主)とは基本的に何者であるのか、という点についての公的な顕現に関わってくるような要素が、潜伏キリシタンの伝承には一切見受けられない。

(3)聖母マリア(御母マルヤ)について、『天地始之事』では、新約聖書では全く想定されていない事項が少なくとも2つ述べられている。1つは、聖母マリア(御母マルヤ)が天に挙げられてから結婚した、という点である。そしてもう1つは、御父デウスと御子と御母マルヤが天上で三位一体の神の位に登った、という点である。新約聖書においてもイエスの母マリアが美化され、神話化されている点が見られないわけではないし、また西欧キリスト教世界では伝統的に(宗教改革の影響が小さかったカトリック世界では今でも)、マリア信仰とでも言うべきところまでの聖母尊崇が見られないではない。日本の潜伏キリシタンの御母マルヤへの気持ちも、西欧キリスト教世界のこうしたマリア信仰の延長上にあると見てよいであろう。しかし日本の潜伏キリシタンの場合、一層強い親近感と尊崇があるようにも思われてならない。

後注

(注1)梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』」奈良学園大学紀要第3集,2015年9月,29~37.

梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』(その2)」奈良学園大学紀要第6集,2017年3月,15~21.

(注2)梶田叡一「旧約聖書『創世記』の物語の日本での受容——潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』における聖書物語の受け止め(1)」プール学院大学研究紀要第58号,2018年1月,1~12.

(注3)梶田叡一「御主イエスの御誕生と成長について潜伏キリシタンは如何に語り伝えてきたか——『天地始之事』における聖書物語の受け止め」エレノア(桃山学院教育大学)第1号,2019年4月,5~16.